

大学教育学会 2015年度課題研究集会
課題研究シンポジウム「学士課程教育における共通教育の質保証」

2015.11.29 岩手大学

共通教育における学習成果の直接評価 —成果と課題—

松下 佳代

京都大学高等教育研究開発推進センター
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

OUTLINE

- 研究課題と研究組織
- 学習成果の評価の現状
- ルーブリック開発のアクションリサーチ
- ルーブリックをめぐる論点
- 今後の課題



研究課題と研究組織 (サブテーマ1)

サブテーマ1のメンバーとフィールド

氏名	所属	役割	
松下 佳代	京都大学	サブテーマ1統括	直接評価の枠組み
森 朋子	関西大学教育開発支援センター	研究メンバー	フィールド(関西大学)でのアクションリサーチ
杉原 真晃	聖心女子大学文学部教育学科	研究メンバー	フィールド(山形大学)でのアクションリサーチ
小野 和宏	新潟大学歯学部	研究協力者	フィールド(新潟大学)でのアクションリサーチ
亀倉 正彦	名古屋商科大学経営学部	研究協力者 (サブテーマ4と兼任)	フィールド(名古屋商科大学)でのアクションリサーチ
斎藤 有吾	京都大学大学院教育学研究科、 日本学術振興会特別研究員	研究協力者	データの分析、間接評価(CLQなど)の開発
齊尾 恭子	島根大学教育開発センター	研究協力者	フィールド(島根大学連携GP)でのアクションリサーチ
山田 嘉徳	関西大学教育開発支援センター	研究協力者	フィールド(関西大学)でのアクションリサーチ
林 透	山口大学大学教育機構 大学教育センター	研究協力者 (サブテーマ4と兼任)	フィールド(山口大学)でのアクションリサーチ

(2015年10月3日現在)

サブテーマ1の研究課題と方法

<1> 共通教育における学習成果の直接評価について、
国内外の理論・実践の現状を把握する。

<2> 共通教育の特定の領域にしばって、
学習成果の直接評価のためのプロトタイプの開発や
事例収集・分析を行う。

- ①事例の収集・分析と蓄積・公開
- ②ルーブリックの共同開発

<3> 直接評価と間接評価を組み合わせ、
学習成果をより統合的に評価する方法を開発する。

本報告の目的

- これらの課題についての過去2年あまりの研究成果をもとに、共通教育における学習成果の直接評価に関する知見をまとめ、今後の課題を展望する。
- このうち<3>については大会ラウンドテーブルで二度にわたって報告してきたことから、今回は<2>を中心に報告する。



学習成果の評価の現状

学習(学修)成果の評価の現状

- 日本: **課程を通じた**学生の学修成果の把握方法
 - ルーブリックの利用の伸び悩み

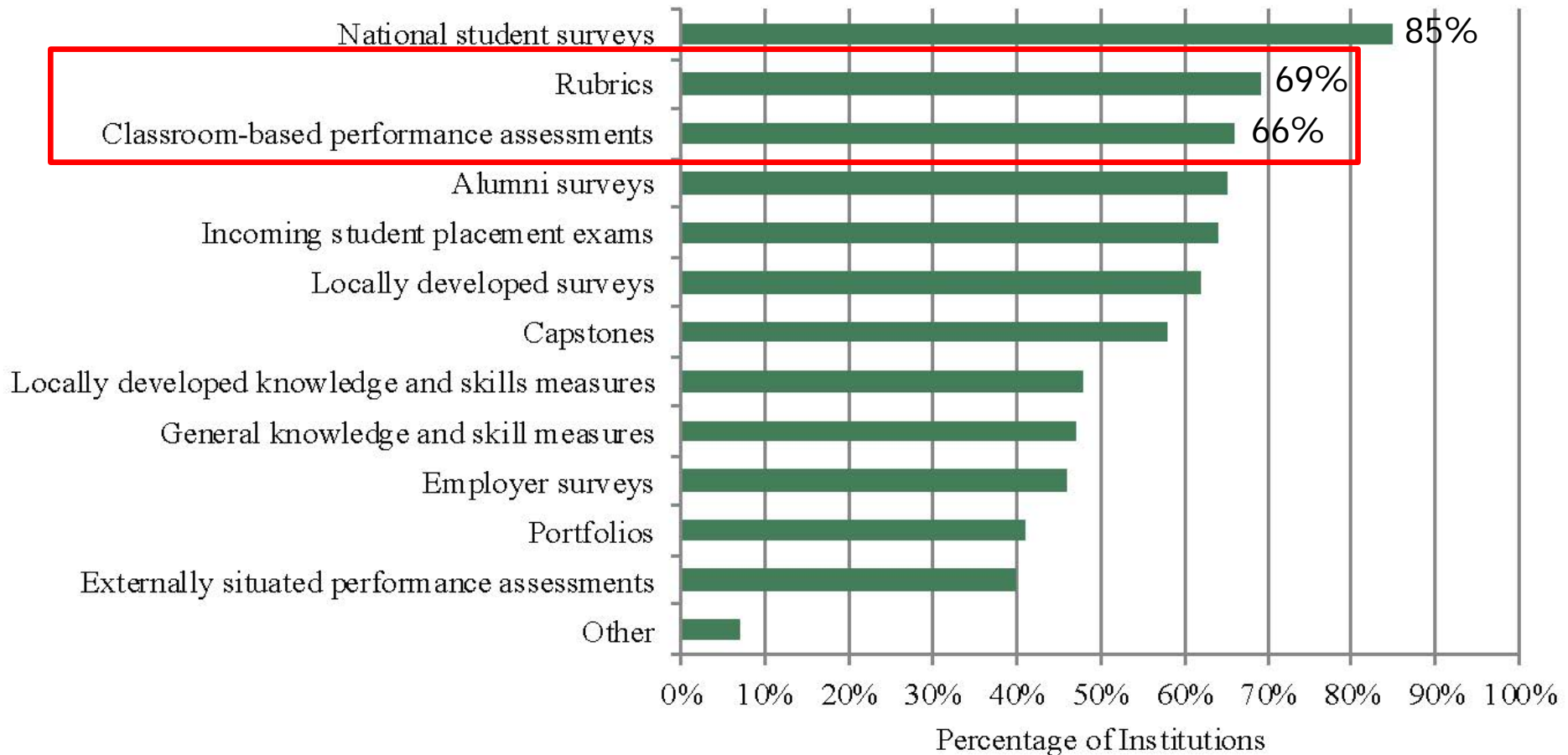
(単位: %)

	2011年度	2012年度	2013年度
質問紙調査(学修行動調査等)	11.0	14.2	21.3
標準テスト(アセスメントテスト等)	16.1	19.9	31.2
ルーブリック	1.4	2.8	3.4
学修ポートフォリオ	11.1	14.9	19.8

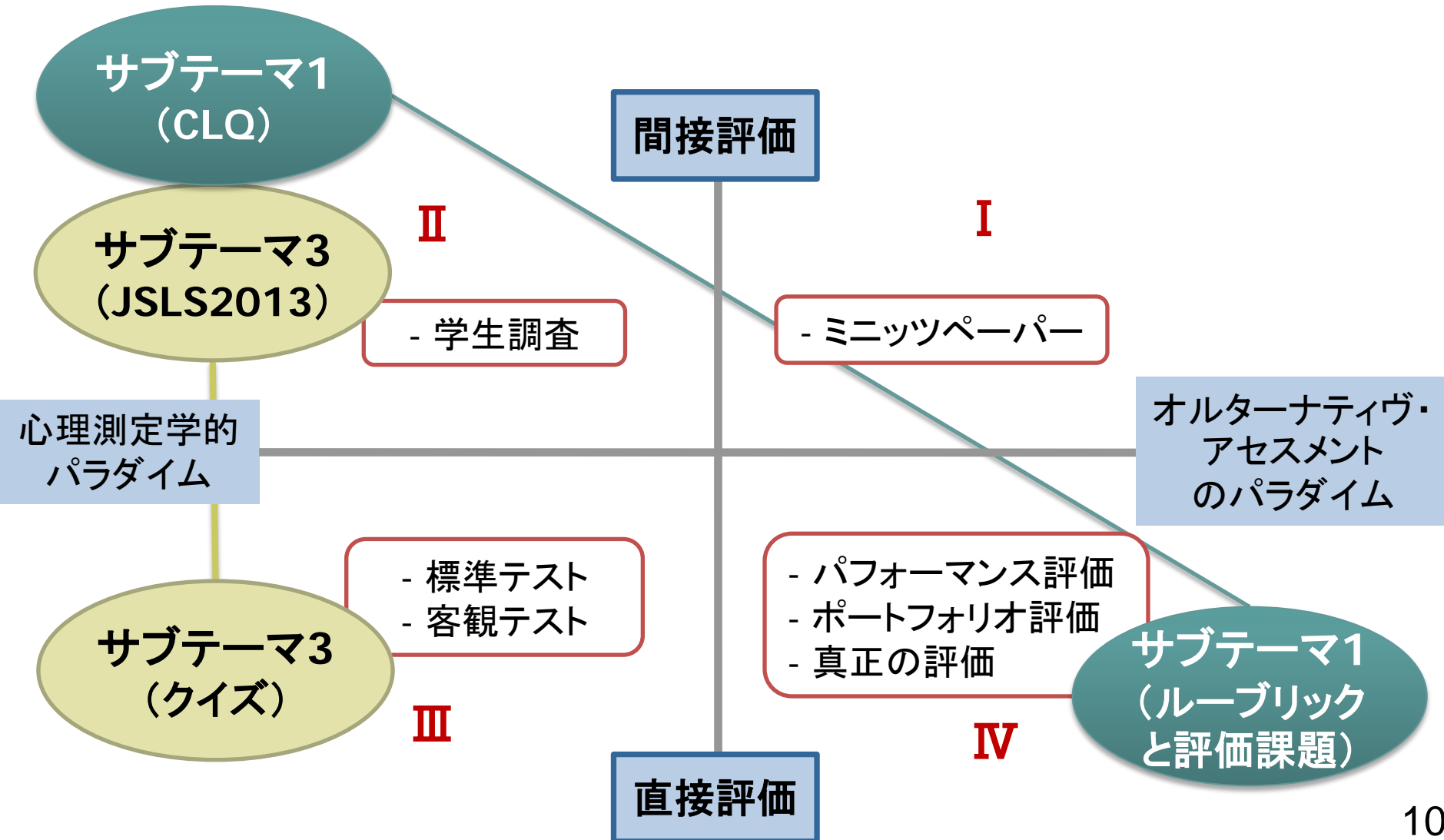
(注) 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」各年度版より作成

【参考】

- アメリカ：機関レベルで利用されている評価方法（2013年）
 - 「全米規模の学生調査」「ルーブリック」「クラス単位のパフォーマンス評価」が、最も利用され、かつ重視されている評価方法



直接評価と間接評価の併用・統合



ルーブリックと評価課題の開発

- AAC&UのVALUEルーブリック
 - メタルーブリック(大学間で共有→modifyして機関全体で利用可)
 - 長期的ルーブリック(学士課程全体をカバー)
- サブテーマ1の各大学で開発したルーブリック
 - 機関・学部等で共有 (AAC&UのVALUEルーブリックも参照)
 - 多くは科目単位のルーブリック



ループリック開発の アクションリサーチ

各フィールドで開発されたルーブリック

	取組の単位	ルーブリックの種類	科目	ルーブリックの特徴
関西大学1	機関レベル	ライティング・ルーブリック	「文章力をみかく」 (主に1年、選択)ほか計8科目	・科目横断的に共有される コモンルーブリック
関西大学2	機関レベル	プレゼンテーション・ルーブリック	「スタディ・スキルゼミ」 (主に1年、選択)ほか計4科目	・科目横断的に共有される コモンルーブリック
新潟大学歯学部1	科目レベル (学部必修)	ライティング・ルーブリック	初年次科目 「大学学習法」 (1年、全学必修)	・4名の教員で共有し、 評価者間信頼性を検討
新潟大学歯学部2	科目レベル (学科必修)	トリプルジャンプ・ルーブリック (2種類)	PBLテュートリアル (2～3年、学科必修)	・ワークシート用とロールプレイ用の2種類 ・長期的ルーブリック
山口大学	科目レベル (全学必修)	科目共通のコモンルーブリック	初年次科目 「山口と世界」 (1年、全学必修)	・科目共通のコモンルーブリックを 各科目でローカライズして使用
名古屋商科大学	科目レベル (全学必修)	キャリアレポート・ルーブリック	初年次科目 「VPSセミナー」 (1年、全学必修)	・卒論用のルーブリックを簡素化した ルーブリック
山形大学	科目レベル	サービ斯拉ーニング・ルーブリック	「フィールドワーク」 (主に1年、選択)	・大学教員と地域住民の 協働的开发



ループブリックをめぐる論点

—各フィールドでのアクションリサーチをもとに—

【1】ルーブリックで評価される学習成果

1-1 ルーブリックでどんな能力を評価しようとしているのか？

	アカデミック・ライティング (文章コミュニケーション)	プレゼンテーション インタラクション (口頭コミュニケーション)	問題発見・解決 課題発見・探求	キャリア・プランニング	市民としての社会参加
関西大学 1 (レポート評価)					
関西大学 2 (プレゼンテーション評価)					
新潟大学歯学部 1 (レポート評価)					
新潟大学歯学部 2 (PBL評価)					
山口大学					
名古屋商科大学					
山形大学					

1-2 ルーブリックで評価しやすい(しにくい)のはどんな領域か？

知的行為の型を学ばせるような領域	個性的な表現や即興的な行為などが必要になる領域
アカデミック・ライティング	パーソナル・ライティング
シミュレーション場面	現実場面

【2】ルーブリックの階層性

2-1 ルーブリックをどの組織単位で共有するか？

- 大学間で、科目横断的に
 - (AAC&U:VALUEルーブリック)
- 全学で、科目横断的に
 - 関西大学
- 全学あるいは部局で、特定の科目で
 - 新潟大学歯学部、山口大学、名古屋商科大学、山形大学

2-2 共通性と多様性をどう両立させるか？

- 何を共有し、何を各教員の裁量とするか？
 - * 大学間—大学—部局—科目(教員)の各階層間でみられる問題

【3】ルーブリックの内容と開発主体

3-1 どんなタイプのルーブリックにするか？

- 一般的／課題特殊的ルーブリック
- 長期的／採点用ルーブリック

3-2 観点、レベル、記述語をどう設定するか？

- 観点の抽出
- レベル間の質的な差異の表現
- 改訂のプロセス

3-3 誰が開発にかかわるか？

- 教員
- 学生
- 専門家(T&Lセンタースタッフ、他大学研究者)
- 地域住民、企業・NPO関係者

【4】ルーブリックの活用

4-1 学習や指導の改善(形成的評価)に役立つか？

- ルーブリックによる評価結果のフィードバック
- 学生による自己評価・相互評価 →【5】学生の参加
- 学生の長期的な学びと成長の評価(異なる評価課題で同じルーブリックを使った場合、その評価を比較できるか?)
cf. VALUEルーブリック

4-2 成績評価(総括的評価)に使えるか？

- 質的差異を表わすレベルは、評語(段階的)にはなじみやすい。
ただし、100点満点(連続的)には使いにくい
- 単純総和(重み付け総和)と総合印象点のズレ

【5】学生の参加

5-1 評価プロセスのどこに学生が参加するか？

- ルーブリックの作成
- ルーブリックを使った自己評価・相互評価
- ルーブリックについての意見(授業改善へのフィードバック)

5-2 自己評価・相互評価の問題にどう対処するか？

- ルーブリックをいつ、どの程度まで提示するか？
- ルーブリックの事前提示は、「評価のための学習」(戦略的な浅い学習)を促すことにならないか？
- 教員による評価と学生の自己評価のズレをどう扱うか？

【6】評価負担の大きさ

6-1 評価負担の大きさはどこから来ているのか？

- 複数の観点×レベルによる評価
- 信頼性の追求、厳格な成績評価へのこだわり
- 複数の教員によるキャリブレーション(基準合わせ)やモデレーション(調整)

6-2 評価負担を軽減するにはどうすればよいか？

- 〈学習としての評価〉という考え方に立つ
- 利用を形成的評価に限定する
- 評価者を教員以外に広げる(TA、学生による自己評価・相互評価など)

【7】 アカウンタビリティのための利用

7-1 アカウンタビリティとの両立は可能か？

- 経年比較、他機関との比較はしにくい
- 卒業論文・卒業研究での評価によって代表させる
- 特定の科目をサンプルに選ぶというやり方もある e.g. 創価大学
- 標準テスト・質問紙調査との併用も視野に入れる



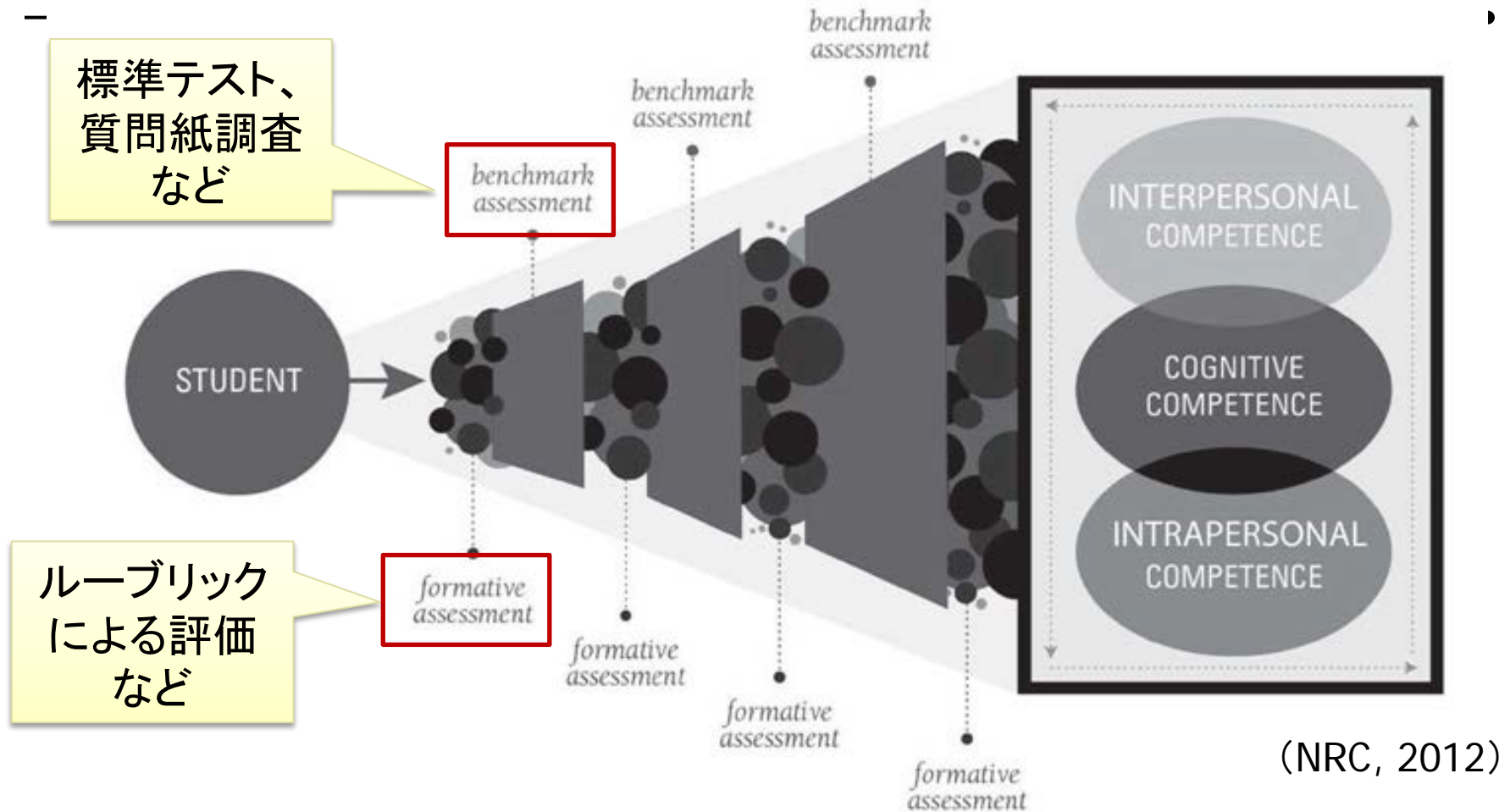
今後の課題

共通教育プログラム全体の評価

● 現状

- 学生調査(タイプⅡ)
- 標準テスト(タイプⅢ)
- ルーブリックによる評価(タイプⅣ)
 - ①プログラム全体の評価が可能か？
 - ②クラス単位の評価の積み重ねか？
 - ①についてのAAC&Uの試み
 - 大学間の壁を越えて、学生の評価事例とルーブリックによる評価結果を収集・蓄積 → 機関間の比較可能性を確保
 - National Research Council(2012)の提案

形成的評価（・総括的評価）とベンチマーク評価との関係



- ・日常的な教育・学習活動では多様な形成的評価によって学習を支援
- ・そこに、ベンチマーク評価を差し入れ経年比較や機関間比較を行うことによって、アカウンタビリティも果たしていく

文 献

- Kuh, G. D., Jankowski, N., Ikenberry, S. O., & Kinzie, J. (2014). *Knowing what students know and can do: The current state of student learning outcomes assessment in U.S. colleges and universities*. National Institute for Learning Outcomes Assessment.
- 松下佳代 (2012). 「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』第18号, 75-114.
- 松下佳代 (2014). 「共通教育における学習成果の直接評価—研究目的・研究計画・進捗状況について—」『大学教育学会誌』第36巻第1号, 62-66.
- 松下佳代・小野和宏・斎藤有吾・白川優治 (2014). 「学士課程教育における共通教育の質保証—直接評価と間接評価の開発と統合について—」『大学教育学会誌』第36巻第2号, 17-21.
- 文部科学省 (2015). 『平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について』.
- National Research Council (2012). *Education for life and work: Developing transferable knowledge and skills in the 21st century*. Washington, DC: The National Academies Press.
- Rhodes, T. (Ed.) (2010). *Assessing outcomes and improving achievement: Tips and tools for using rubrics*. Washington, DC: AAC&U.
- 山田礼子・森利枝・亀倉正彦・斎藤有吾・高野篤子 (印刷中). 「学士課程教育における共通教育の質保証—評価データの併用と質保証のマネジメント—」『大学教育学会誌』第37巻第2号.
- 山田嘉徳・森朋子・岩崎千晶・田中俊也・松下佳代 (2015). 「第14回関西大学FDフォーラム・大学教育学会課題研究『学士課程教育における共通教育の質保証』合同企画イベント『学習成果をどう評価するか？—評価課題とルーブリックの開発—』事前アンケート集計結果」.